

## いじめ傍観者の支援行動に与える 被害者との関係と対人スキルの影響

須藤 桃 (人文学研究科臨床心理学専攻修士2年)

### 目 的

森田・清永 (1994) はこれまでのいじめ研究を基に、「いじめ集団の四層構造論」を提示した。その中でいじめの傍観者を、いじめ場面を取り巻く第三者としていじめ抑止のキーパーソンと位置付けている。しかし久保田 (2008) は、傍観者が実際に抑止力になることは稀であることを報告した。

塚本・田名場 (2007) は、傍観者がいじめ場面に関わる行動を「いじめ被害者への支援行動」(以下、支援行動と略記)として検討した。支援行動とは、いじめ場面に介入するのではなく、いじめ被害者を支える行動を指す。支援行動は、傍観者といじめ被害者が友人関係にある時、直接的にいじめ場面に介入するよりも生起されやすいことが明らかにされている。

本研究では、傍観者と被害者の関係の質的な側面として友人との活動を取り上げた。また、傍観者のソーシャルスキルの中でもアサーションスキルに注目し、これらが支援行動の生起に与える影響を検討することを目的とした。

### 方 法

#### 調査協力者

I市内中学校在籍の中学生425名(男子190名、女子235名、平均年齢13.71歳)。

#### 質問紙の構成

1. 友人との活動尺度 (榎本, 2003) 相互理解活動、共有活動、閉鎖的活動、親密確認活動の4つの下位因子からなる。
2. 自己表明尺度 (柴橋, 2001) 限界・喜びの表明、意見の表明、断りの表明、不満・要求の表明の4つの下位因子からなる。
3. 支援行動 先行研究を基に作成した。
4. 過去のいじめ経験 森田・清永 (1994) を参考に作成した。

フェイスシートに、学年・性別・年齢の記入を求めた。また親しい同性の友人を想起してもらい、友人のイニシャルの記入を求めた後、友人との活

動尺度に回答を求めた。次に、その親しい友人がいじめに遭っている場面を読んでもらい、その後どのような支援行動をとるのか回答を求めた。最後に自己表明尺度、過去のいじめ経験の回答を求めた。

### 結 果

**1. 因子構造の検討** 各尺度に因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、友人との活動尺度4因子( $\alpha=.72\sim.85$ )、自己表明尺度4因子( $\alpha=.38\sim.84$ )、支援行動2因子( $\alpha=.64\sim.85$ )が抽出された。支援行動は、「周辺の支援行動(いじめについて尋ねたりせずに支援する)」、「直接的支援行動(いじめについて尋ね、問題解決を図ろうとする)」と命名した。

**2. 友人との活動とアサーションスキルの支援行動に対する影響** 各支援行動を従属変数として、Step1で過去のいじめ経験、Step2で不満・要求の表明を除いたアサーションスキル、Step3で友人との活動、Step4で友人との活動とアサーションスキルを組み合わせた交互作用項を独立変数として投入し、階層的重回帰分析を行った(Table1)。

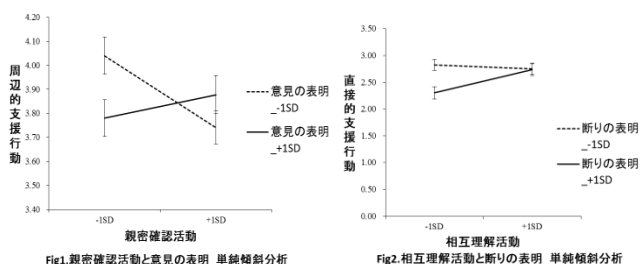
また、交互作用項の支援行動へ及ぼす影響を検討するために単純傾斜分析を行った。

(1) 周辺の支援行動 Step1~4で観衆が有意な負の影響、仲裁者が有意な正の影響を示した。Step2~4で、限界・喜びの表明が有意な正の影響を示し、断りの表明が有意な負の影響を示した。またStep4で交互作用項を投入した結果、親密確認活動と意見の表明が有意な正の影響を示した。単純傾斜分析の結果、親密確認活動の頻度が少ない場合、意見の表明は周辺の支援行動に有意な負の影響が見られ、意見を主張するスキルが低い場合、親密確認活動は周辺の支援行動に有意な負の影響を与えることが示された( $B=-.229, p<.05$ ,  $B=-.089, p<.01$ ) (Fig1)。

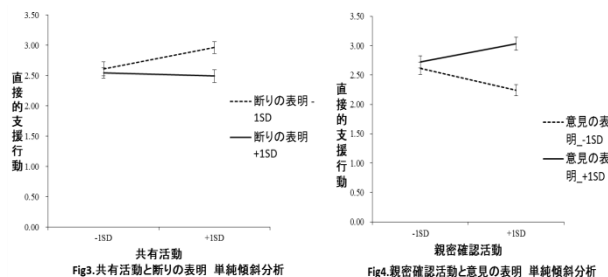
(2) 直接的支援行動 Step1で、観衆が負の影響を及ぼす傾向が、仲裁者が有意な正の影響を示した。Step2~4で、意見の表明が有意な正の影

響を示し、断りの表明が有意な負の影響を示した。Step4で交互作用項を投入した結果、相互理解活動と断りの表明、親密確認活動と意見の表明が有意な正の影響を、共有活動と断りの表明が有意な負の影響を示したため、単純傾斜分析を行った。

相互理解活動と断りの表明では、相互理解活動の頻度が少ない場合、断りの表明は直接的支援行動に負の影響を与え、断るスキルが高い場合、相互理解活動は直接的支援行動に正の影響を与えることが示された ( $B=-.445, p<.001, B=.201, p<.01$ ) (Fig2)。



に正の影響を与えることが示された ( $B=.695, p<.001$ )。次に、意見を主張するスキルが高い場合、親密確認活動は有意な正の影響、低い場合は有意な負の影響を与えることが示された ( $B=.092, p<.05, B=-.110, p<.01$ )。 (Fig4)



### 考察

今回の結果から、アサーションスキルは支援行動を促進する影響が見られたが、友人との活動については、支援行動を直接促進する影響は見られなかった。しかし、友人との活動はアサーションスキルとの関連で、支援行動を生起させたり、抑制させることが明らかとなった。

### 文献

塚本 琢也・田名場 忍 (2007). いじめ場面における第三者の傍観・仲裁行動の発生・抑制要因の探索的研究 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, 第4号, 19-29.

Table1 周边的・直接的支援行動についての階層的重回帰分析 結果

変数名	Step1		Step2		Step3		Step4	
	周边的	直接的	周边的	直接的	周边的	直接的	周边的	直接的
傍観者	.067	.039	.044	.054	.041	.054	.037	.044
加害者	-.063	.053	-.047	.061	-.047	.048	-.034	.032
被害者	-.029	-.034	.043	-.005	.028	-.007	.032	.008
観衆	-.172 **	-.096 +	-.118 *	-.055	-.114 *	-.060	-.112 *	-.049
仲裁者	.221 **	.110 *	.149 **	.047	.154 **	.058	.150 **	.050
限界・喜びの表明			.482 **	.041	.473 **	.001	.492 **	.052
意見の表明			-.016	.300 **	-.018	.270 **	-.037	.219 **
断りの表明			-.088 *	-.180 **	-.096 *	-.157 **	-.088 +	-.131 **
相互理解活動					.045	.091	.045	.088
共有活動					-.044	.065	-.041	.073
閉鎖的活動					.037	.002	.030	-.038
親密確認活動					-.066	-.030	-.061	-.015
相互理解活動*意見の表明							-.006	.070
相互理解活動*断りの表明							.066	.141 *
共有活動*意見の表明							-.033	.045
共有活動*断りの表明							-.084	-.113 *
閉鎖的活動*意見の表明							-.019	-.060
閉鎖的活動*断りの表明							.017	-.093
親密確認活動*意見の表明							.124 **	.170 **
親密確認活動*断りの表明							.066	-.007
$R^2$	.08 **	.02	.30 **	.13 **	.30 **	.15 **	.33 **	.21 **
$\Delta R^2$	.08 **	.02	.22 **	.11 **	.01	.01	.03 *	.06 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$